

はたらく

春の日の陽光が一段と強くなっていく。冬の間、春の農作業を待っていた田んぼが息づき、田にあぜ塗りの人達の姿が、目につき始める。その風景は大浦の大地にふさわしい。

かつて、この大浦の地は海拔零メートル程度であり、降雨のたびに、水田が冠水し、毎年／＼その年の収穫を心配しなければならなかった。

そこで、人々は、川舟で川底の泥をさらい、水田に客土とし、少しでもその標高を高くすると同時に、田の肥料とする努力を続けてきた。

また、この努力は川底を深くし、川舟が刈取った稲を積んでの通行を容易にすると言った効果もあり、大浦の米作を支えた大切な仕事でもあった。この川底の泥をすくい、それを川舟で運ぶと言った仕事は、大浦独特の労働であった。

昭和三十年頃から始まった土地改良事業により、川泥を水田に客土する必要もなくなり、この大浦ならではの働く姿が消えて久しい。

しかし、大浦で働く姿の多くは米作りであり、この米作が続いてきたのは、そのような労働があったからに外ならない。

土地改良事業により、あぜ塗りからはじまる一連の米作り作業は、殆どが機械と農薬に変わり、人々を重労働から解放した。そして、それは、とりもなおさず働く人々の姿をも変えた。かつて、家族全員での仕事であった米作りも、機械操作の技術や肥料管理が中心となり、鎌、鍬農業の姿から一変してしまった。

しかし残念な事には、田んぼへ行く時間が減り、仕事の合い間にあぜに腰を下し、談笑する時間もなくなってしまった。田から憩いが消えてしまったのである。このように水田での働く姿も、時代とともに変わってきており、その働く姿も、いつの日にか姿を消すかも知れない。

大浦は周辺より水田が潰れ、工場や、公共関係の施設が建ち始めたり、宅地が変わったりして、年々水田の減少が目立ってきている。やがて、大浦の水田で働く姿も、この写真でしか見られなくなる日がくるかも知れない。

とはいえ、この大浦は殆どの土地が水田である。この地をどのようにして利用するかを十分に考えなければならぬ。農作業以外の仕事の姿が必要なのか、それとも今のまま残した方が良いかは、今後の課題である。

(東蚊爪町・小川祥夫)





米づくり

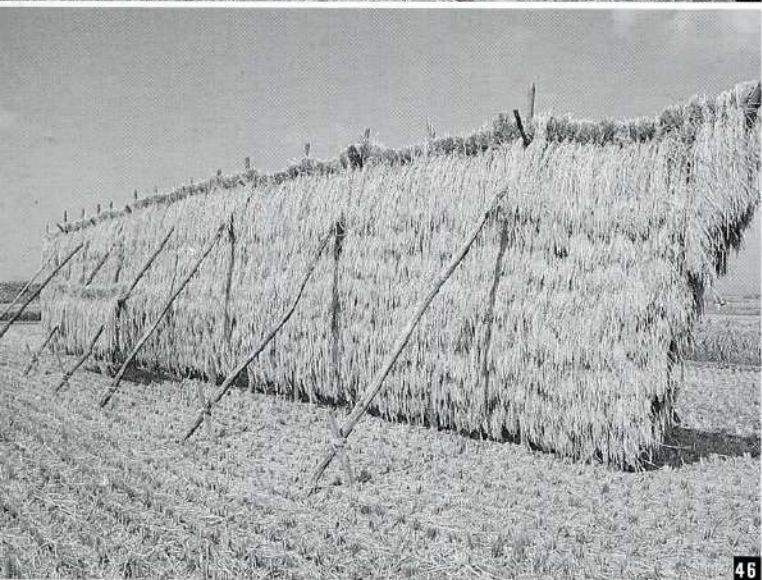
水に恵まれた土地柄だけに、農業の中心はもっぱら米作となっている。
土の香りと共に農作業に精を出す人の姿は田植えから収穫まで大変だ。



45



43



46



44

43 工場に囲まれて刈り入れをする。この田んぼもいつまで続くか

44 秋の日差しのもとでの稲こき

45 家族総出で稲干し

46 昔はあちこちで見られた稲干し

39 腰をかがめて田植えをする姿も珍しくなった

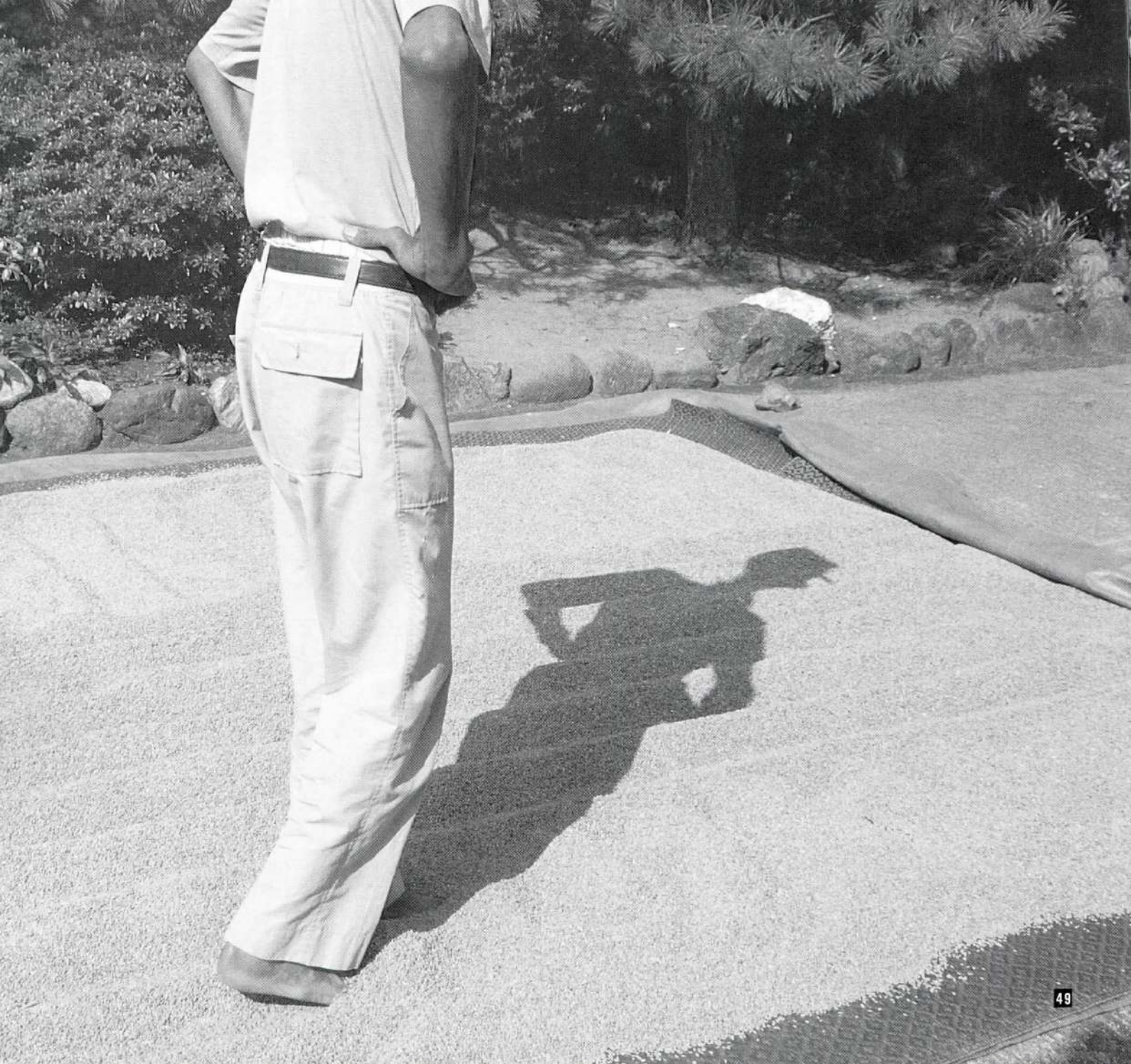
40 籠で苗を運ぶ

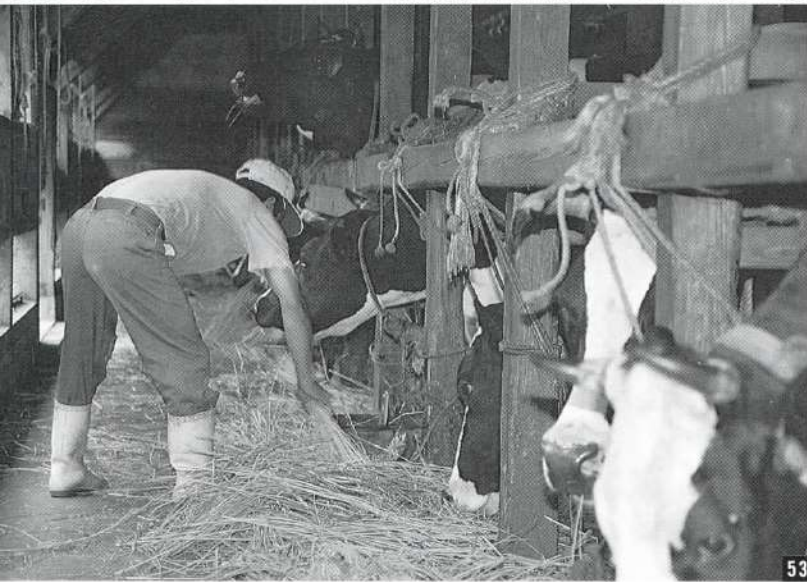
41 稲の見回り、秋は近いぞ

42 稲刈り



- 47 ライスセンターでの精米袋詰め
48 夏の炎天を利用してむしろ干し
49 足を摺りながらもみ干し





- 50 道端でマメ打ちの準備をする姿も、のどかなもの
51 マメをとりながら楽しい語らい
52 ソリに野菜をのせるお年寄り
53 大浦校下唯一の牛舎



56



54



57

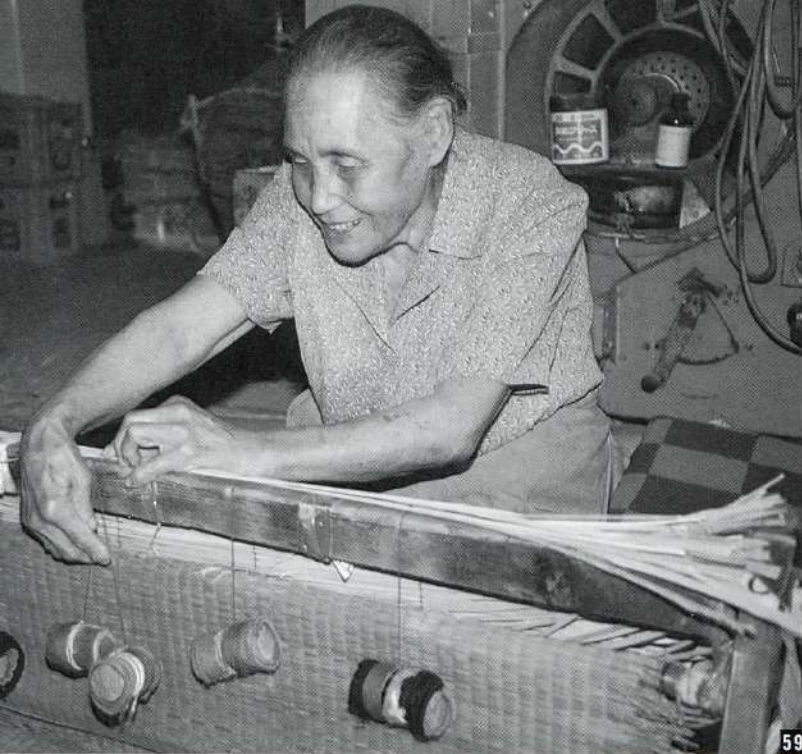


55

寒ぶな漁

寒のフナは身がしまっとうまい。古来から伝わる漁法『まえがけ』を伝える後継者もなくなりつつある。雪の降りしきる日、二人一組になって、川の上流と下流に網をはり、泥中に冬眠しているフナを竹ざおですくい上げ一網打尽とする。大根おろしとフナをあわせた『きじょ』や正月料理フナの『甘露煮』の味は郷土料理の珍味だ。

- 54 お年寄りのアルバイト、漁網のつくろい
- 55 寒ブナ漁の伝承者も少なくなった
- 56 報恩講の仏具磨きも楽しい憩い
- 57 夏の風物詩、青年団による殺虫消毒のようす



- 58 河北潟に生息するカルガモ駆除のようす
- 59 魚屋に頼まれて、まくもんづくりに精をだす。今では仕事をする人も少なくなった。
- 60 川べりに自生するマコモの葉を夏の日差しで干す、まくもん干し

